

1 G私たちはなぜ「空気を読む」ようになったのか

《はじめに》

現在、「空気を読む」という言葉は日常的に使われている。「空気を読む」という言葉は広辞苑ではその場の空気を察すること、暗黙のうちに要求されていることを把握して履行することとされている。私たちは日常生活において「空気を読む」ということを行っていないだろうか。例えば、自身の意見を発表する場において、私たちは、周りの反応を考えることで、あえて意見を発さないことがある。

しかし、それは本音で話せていないということでもあり、相手に過剰に気遣いすることでストレスを感じることも頻繁にある。ではなぜ私たちは空気を読むようになったのだろうか？

《研究目的》

私たち看護学生は、授業の中でグループワークを行うことが多い。年齢や考え方の違う人たちと意見交換する際に、空気を読まず自分の考えばかり言っていたらうまくいかない。

だが、空気を読んで自分の考えを言わないでいると、話が滞ってしまう。このような状況に私たち探求メンバーは全員、ストレスを感じるがあった。このストレスを感じる「空気を読む」意味を解明することでストレスを感じず空気を読むことができると考えたためこの研究をすることとなった。

《用語の定義》

私たち探求グループでは、「空気を読む」とは、「その場の雰囲気や察し、他人に合わせる」と定義する。

《仮説》

私たち探求メンバー自身の経験から、他人に嫌われたくないため空気を読むと仮定する。

《研究方法》

文献を基に日本の環境面、歴史面、性格面の三側面から考えを深めて、仮説検証していく。

《結果》

環境面において、日本の宗教は他者に対する尊重が最も重要視されている。また単一民族国家であるため、空気を読みやすい環境にあると言える。日本は島国であり小さな地形の中で生活を営んできたため、他国との関わりを持つことが困難であった。それぞれの国民の生活を保つためには「協力」が重要であった。歴史面においては、縄文時代と第二次世界大戦が大きく関係していると言える。縄文時代には稲作が普及していた。稲作を行うには他者との協力が必要であった。また、第二次世界大戦では、「お国のために身を捧げ、死んでいく」ということが美德とされていた。

しかし、そのような思考には同感していない者もあり、この頃から、自身の本音を発信することができずに周りに合わせるという風潮があった。

性格面では、日本人は「他人志向型」であることが考えられる。日本人はストレスに対して弱い遺伝子を持っており、また遺伝子的に不安を抱きやすい人種である。このように、ストレスに対する耐性がさほど培われていない日本人が多いために「空気を読む」傾向が増したと考えられる。

《結論》

私たちは他人に嫌われないように、空気を読むという仮説を挙げた。研究を通して、現代のいじめ問題から分かるように、他人に嫌われないように、空気を読むことも事実としてある。それだけでなく他者と協力して共存していくために、必然的に空気を読むようになったことが分かった。私たち看護学生は、患者さんによりよい援助を行うために、同僚や多職種と協力すると目的を明確にしていれば、今まで感じていた空気を読むという行動にストレスを感じることを軽減できると感じた。

《参考文献》

- ・日高美咲(山口大学)
- ・小杉孝司(山口大学):「空気を読む」という表現の社会、心理学的研究

2012年9月28日